

菊炭原木林（クヌギ）

1. 植物の特徴

「しいたけ原木」、「落ち葉」の項でも登場するクヌギだが、茶道用の高級炭・菊炭の原料としては他の樹種での代替を許さない独自の存在となっている。上質の茶の湯炭である菊炭(産出する地名によって池田炭、佐倉炭、伊予炭などと呼ばれる)の条件として、名の由来のように切り口が菊の花のように美しい割れ目がありしまりがあること、樹皮が薄く密着していること、真円に近いこと、燃やしている間にはぜないことなどがあげられる。さらには燃え尽きた後にも白い灰が粉雪のように残るなどの風情、火付き、火持ちがよいなど、今もお茶席には欠かせない高級炭としての地位を持っている。

これらの条件を満たす炭が焼ける樹木がクヌギだ。ドングリも、成長した樹木の形も非常によく似ている樹木にアベマキがあるが、炭に焼いた場合も見た目にはかなり似ている。しかし、火をつけるとアベマキ炭は激しくはぜてしまうため、菊炭とはならない。

クヌギは成長が早いため、一般的に里山林の周期が 20 年前後と言われる中、クヌギ林に限れば 10 年ごとに同じ林を伐採することができるという効率の良さも大きな特徴となる。これは、ツル類などの繁茂が仮にあっても決定的に木を痛める状態になる前に回帰できるという点でも人とのつきあいがしやすい樹木だった。

しいたけ原木林のクヌギの項にも出てくるが、“虫を呼ぶ木”であるクヌギは生態系を豊かに保つための要の樹木と言える。

2. かつての活用

兵庫県と大阪府の府県境を流れる猪名川の上流域は平安時代にさかのぼれる炭焼きの記録が残っている。他にもクヌギ林の面積や分布が記された古文書、や「和漢三才図会」などの古い書物にもこの地域のクヌギの里山林についての記載が残っている。里山林に関する古文書類が残っているのはこの猪名川上流域の里山だけという独自性を持っている。

これは、茶の湯炭(集散地として池田に集まり、これが池田炭と言われた)としての評価が高まる以前にも、当地域にあった銀山、銅山の精錬用に焼かれていた炭の品質の高さが背景にある。良質の木炭は池田、大阪方面に出荷され、やがて京都のお茶席などに使われるようになった。

すべてのクヌギではないが、この地域のクヌギは台場クヌギと呼ばれる「頭木仕立て」で育てられていた。一般的な伐採は株の地際で行われるが、台場クヌギは幹を地上部より 1~2mの所で伐採し、その萌芽を 8~10 年後に再び伐採するという繰り返りで次第に土台となる主幹がだんだんと太く

なり独特な形の株が形成されている。

台場クヌギは、伐採後の萌芽の生育が早いこと、境界の目印、狭い土地の有効利用、シカ対策などのためだと考えられている。

戦前までは炭焼きが盛んに行われていたため、一帯の山は見事なパッチワーク状になっていたという。皆伐した一年目、二年目…と8～10年生のクヌギ林がそれぞれの状態で山々に点在し、景観としての面白さと共に、さまざまな環境が存在していたので非常に豊かな生態系を持っていた。

3. 荒廃の現状

歴史のある高級菊炭の生産地ではあるものの、日本中が変化した燃料革命によって炭焼きは大激減をした。そのためこの一帯のクヌギ里山林のサイクルも途切れたところが多い。放置によって林内には照葉樹のヒサカキ、ネズミモチ、シイ、カシ類が入り込み、ネザサ、コシダ・ウラジロなどの競争力のある植物が入りこんでいる。

この地域本来の暖温帯の原生は照葉樹林帯であるため、この自然の遷移で照葉樹林帯の生態系の種多様性が望めるという意見もある。しかし、長年里山化されてきた中で、本来の照葉樹林の構成種の多くが失われたと考えられるため、このまま遷移が進んだ結果成立する照葉樹林は大変単純な種の構成になると言われている。

また、炭焼きがされなくなった台場クヌギの中には萌芽幹が巨大化したもの、病虫害を受けたもの、スギ、ヒノキによって被陰されたもの、ツル植物がからみついたもの、伐採によって損傷されたものなども多くみられる。

利用されていたころのクヌギ林は高さ8mほどで低林と呼ばれる状態だったが、放置クヌギ林は15mをはるかに超えるようになっている。また、輪伐（皆伐する林が順ぐりにまわって何年かごとに同じ場所を伐るやり方）されなくなったためにパッチワーク状の景観もごくわずかとなった。

4. 整備している事例

兵庫県川西市黒川で今も昔ながらの菊炭を生産している今西勝さん・学さん親子はこの地域で唯一の炭焼き生産者となっている。菊炭生産によってこの地域の歴史のあるクヌギ原木林の回転を維持している。

また、今西さんの伝統的な炭焼き地域・黒川を含んだ北摂地域(伊丹市・宝塚市・川西市・三田市・猪名川町の4市1町)は北摂里山博物館構想を立て、この地域一帯をエコミュージアムとして活性化を進めている。「日本の里山林」と銘打たれているのは、前述のように歴史性・記録性があること、茶道の菊炭としての文化性が高いこと、台場クヌギという特殊性、現在も生業としての炭焼きが残っているためにパッチワークの景観が見られること、その環境が多様な動植物の多さを持つこと、群生して見られることの稀少な

エドヒガンサクラがあること、などの独自性・特異性を全面に打ち出して市民参加による里山の放置林管理を進めている。(クヌギ林には限らない)

5. 整備の仕方と工夫

今西さんの菊炭用のクヌギ林は、炭に焼くことによってクヌギ林が営々と続いている整備と利用が一体となっている。

伐採は、12月半ばに木々の紅葉が始まってから集中して一冬用の炭に焼く分の山を伐る。面積的には毎年約1.5haほどで、クヌギの本数によって増減はある。父子2人と雇用しての1~2名の伐り手、及び週末の親族の助っ人などを得て1週間ほどの作業となる。集中的に伐採はすませ山に倒しておく。これ以後は、炭焼きと次の窯入れの原木づくり(1mの玉伐り)が1セット7日間のサイクルが5月8日まで続く。

1.5haの山は平均すると2軒の所有者から買っている。10年で同じ山に回帰するので、今西さんが利用している山は総計で約15haとなる。山はクヌギが中心だが、他にもコナラ、サクラなども育っているし、シイ、カシ類が入っていることもある。これら一切をまとめて皆伐する。皆伐の前には下刈が必要になることが多い。

炭窯では良く焼ける場所とそうではない場所があり、また、1mの原木を縦にぎっしり詰めたあとにできる窯の上部空間にも大量の柴を入れる必要があるため、これらクヌギ以外の木も枝類もすべて無駄なく炭焼きに利用できる。

炭の窯入れと出しは半日で終了するため、7日サイクルの残りの日々はほとんど山での原木づくりとなる。3cmから9cmまでの径の太さが炭用、それ以上の太さのものはしいたけ原木用に利用する。しいたけ原木は主に県内の業者に出し、残ったものは自家出荷分としてしいたけ生産もしている。玉伐りと共に細かい枝を払い落とすナタ作業もかなりの作業部分をしめる。

伐った原木を運搬するのは急峻な地形が多いこの地域では道が奥までは入らないため集材機利用も多くもっとも手間がかかっている。

今西家では冬季の菊炭づくりと夏場の米づくり・畑作の両輪がまわっているので、山での作業は5月8日で終了と決め、炭焼きは6月上旬までされるが山での仕事は終わる。

伐採後のクヌギ林は、これまではその後はほとんど放置だったが、数年前からシカ害が甚大となり(若芽をすべて食べられて全滅した林がでた)、それ以後シカ対策の電気柵張りが必須となっている。

10年回帰までにすると望ましい作業は下刈りで、伐採後の2年目は日陰に弱いクヌギが枯れないようにもっともするといい作業。回帰前の6年ごろにも一度下刈りをすると、10年目に戻ったときの伐採作業は大変楽になる。

一般的には里山の管理として望ましいと思われているもやかき（若芽の本数整理）と除伐は、「しないほうがいい」作業だという。まず、もやかきは、クヌギの場合伐採後 20 本ぐらいが一斉に萌芽するが、萌芽枝はもろいために残したい芽のまわりを刈る作業で残したいものまで折ってしまうことが多いこと、10 年後の回帰したときには台場クヌギならば 3~5 本、普通の低い伐採での株ならば 1~2 本に自然淘汰されているので、これまでもやかきの必要性は感じたことがないという。

また、除伐も基本的にはしない方がよく、それはまっすぐにクヌギを伸ばして成長させるには適度な込み具合が必要だからだ。ただし、あまりまわりが込んでクヌギを被圧すると日陰に弱いクヌギは枯れる可能性があるので頃合いは必要だという。しかし、現実には手がまわらないこともあり除伐をすることはない。

ツル類は確かに伐採時に危険になるものだが、木そのものとしては 10 年ほどの回帰ならばひどく締めつける状態になっていないことと、ツルが巻かれた状態が鑑賞的には面白い炭となるので、商品としては困らない。

現在、今西さんの持ち山 1ha にクヌギの植林が始まっているが、この植林、下刈、及び伐採した山への下刈りは市民ボランティアが参加してくれてありがたい助っ人になっている。

6. 課題と注意点

大きな課題は 2 つ。菊炭の原材料であるクヌギの存続とシカ対策。

今西さんが炭焼きに使える山は総計で約 15ha ほどで、それ以外のクヌギ林は戦後と燃料革命以降の放置によって高齢化・遷移の進行などですぐに炭焼きに使える状態の山はなくなっている。

植林を始めたものの、植林には次の点でハードルがある。1 つは、植林したクヌギが現状の菊炭の品質の材になるまでには最低でも 2 回転(30~40 年)を必要とすること。繰り返し伐採している株ならば 10 年で伐採できるが、植林樹は最初の伐採まで 20 年を要する。その場合、クヌギは普通焼く倍の年数を経ているために樹皮の具合が厚く硬く、本来の菊炭とはならない。また、通直性なども良くない。2 回転目でもまだ質的には劣るため、安定した材料をとるためには 3 回転目ぐらいまでは時間を要する(しいたけ原木林と同様の話)

さらに、植林のためのクヌギの苗木づくりが大きな課題となる。クヌギは他の地域のものを利用したことがこれまでもあるが、黒川地域のクヌギとは異なる点が皮が硬く厚い—やはり菊炭の品質を下げるため、できるだけ黒川地域のクヌギのドングリで苗木をつくるのが理想だという。

しかし、クヌギのドングリは前述のようにアベマキのドングリと酷似して

いる。長年見慣れている今西さん親子でもドングリの状態でのクヌギ・アベマキの見分けは不可能だという。

現在、これもボランティアグループがドングリ拾いをして苗木業者に提供してくれているが、アベマキの混入が大いに考えられて心配されている。最終的に炭として使ったときには一目瞭然の差異が生じるが、それまではなかなか見分けがつかないために、最後の最後に「違った」となることの被害も甚大であるため、この地域でのドングリでの苗木づくりをどうできるかが大きな課題となっている。

また、全国で困難な状況になっているシカ害は、今のところ電気柵を設置すれば食害が防げている。これは、伐採面積が膨大ではないことでその年皆伐した面積をきっちり電気柵で囲えるために、シカが侵入できなくなっているからだ。

ただし、労力的な負担だけでなく、この伐採跡地の電気柵については公的補助を受けていないために資金的な負担も大きくなっている。

その他には、炭の需要としては今後も安定したものが見込めるが、伐採のできる人が地域にほとんどいなくなっている（現在依頼している人は70歳代）。また、この地域に限らないが、山主の山離れは激しく、ほとんどの山主は「自分らはいらんのだから次伐りたかったら自分でやり」と管理を丸投げする形になっている。さらに、代が変わると境界がわからなくなる問題も大きくなっている。

7. 備考

伝統的な菊炭の生産者が一軒ではあるものの活発に生産を続け、かつ、地域一帯としての里山保全に関しての意欲が高い北摂地域ではあるものの、広がる放置里山は多い。兵庫県の北摂地域では、いわゆる炭焼きでのクヌギ林サイクルを低林仕立て、放置のままを照葉樹林、新たな管理での高林仕立て、と目標の林型を設定して応じた管理を進めようとしている。生産と市民参加による管理で多様な里山が再生されることを期待したい。